

准教授就任のご挨拶

「10年先を考えて行動しなさい」

琉球大学大学院医学研究科 腎泌尿器外科学講座 准教授 宮里 実 (7期生)



琉球大学医学部医学科同窓会の皆様こんにちは、平成27年4月1日付で、腎泌尿器外科学講座准教授を拝命致しました7期生の宮里実と申します。早いもので卒後23年目を迎えています。これまでの同窓会の皆様のお力添えに

この場を借りて厚く御礼申し上げます。

私は、平成5年に琉球大学医学部医学科を卒業後、ただちに初代琉球大学泌尿器科学講座大澤炯教授主宰の泌尿器へ同期3人で入局しました。当時、大学で1-2年みっちり研修後出向するのが慣わしでしたが、何と卒後3か月目で東京都立清瀬小児病院に出向することになりました。東京で生活してみたい、そんな軽い気持ちからでした。しかし、そこで出会った恩師(現自治医大こども病院教授)がその後の私の医者人生に大きな影響を与えました。「10年先を考えて行動しなさい」と叩き込まれ、この23年座右の銘として私を支えてくれました。とはいえ、これまでの医者人生は激動の連続でした。

2年間の東京勤務の間に、二代目小川由英教授に代わりました。小児泌尿器科を中核にしながら、県内関連病院、特に鹿児島県の病院では年間300例の経尿道的前立腺手術、前立腺全摘といった多くの泌尿器科手術を経験しました。平成16年に脊髄の神経伝達物質と排尿の研究で学位を取得、その後平成18年から2年間アメリカピッツバーグ大学泌尿器科にポスドクとして留学することになりました。そこでは、これまでの排尿研究をさらに広げ、難治性下部尿路疾患に対する遺伝子治療や創薬の開発に携わりました。

Déjàvuなのか、帰国後まもなく三代目斎藤誠一教授が東北大学から赴任されました。斎藤先生の計らいで、平成21年から2年3か月東北大学泌尿器科へ国内留学することになりました。日本一の前立腺の名士と言われる荒井陽一教授の薫陶を受け、腹腔鏡手術を中心に腫瘍学を学びました。これまでの殻を破るというのが私に課された命題でした。まさか、平成23年3月11日、東日本大震災を経験するとは夢にも思わず。不思議なもので、3週間風呂にも入れずろくに食事にもありつけない状況であったにも関わらず、その当時辛いという記憶がありません。里見

進病院長(沖縄県出身)を中心としたトップダウンの圧巻の緊急対応に鳥肌が立つ思いをした記憶が今でも鮮明によみがえります。

平成23年8月に沖縄に戻り、2回目の医局長を務めました。その時心に誓ったことは二つ、泌尿器科のイメージアップと医局員を増やすことです。学生授業の充実、シミュレーションセンターを利用した参加型実習、ポリクリ、クリクラの院外実習、国家試験対策など、斎藤教授を中心にスタッフ間で綿密に計画し、良かれと思うことはすべて取り入れました。もちろん、ノミニケーションも。医局長最後の仕事として、泌尿器科の呼称変更にも取り組みました。おかげさまで、平成26年から「腎泌尿器外科学講座」として新たなスタートをきりました。

話はガラッと変わります。同窓会の皆様、2015年前立腺癌が肺がんを抜いて男性がんの第一位となったことは御存じでしょうか。2020年、東京オリンピックの年に第一位になる予想でしたが、予想を大幅に上回り、何と5年も早く欧米並みとなりました。2015年、80歳以上の高齢者も初めて1,000万人を突破しました。排尿、排便といった排泄、合わせて性機能の問題は、高齢者のQOL向上と健康寿命の延長には欠かせないものです。泌尿器科学は、腫瘍、感染症、小児、排尿、性機能、結石、内分泌、婦人泌尿器科、腎移植の専門分野です。どこから手をつけたらよいか、泌尿器科に求められるものは今後益々増加してくることが予想されます。そのためには、多くの仲間が必要です。そんな中、今年4人の新医局員が入局してくれました。排尿障害が、生活習慣病の全身性疾患の一つとして現れていることが最近の私の研究で明らかになってきており、多くの他科の仲間も必要です。

果たして次の10年、私に託された課題は大きいと感じています。身の引き締まる思いです。「10年先を考えて行動しなさい」は、まずは自戒の言葉したいと思います。23年間、どちらかという外に目が向いていた分、これからは地に足をつけ、母校後輩の学生教育、完結型の沖縄県の医療の充実、世界レベルの研究推進、大学院生指導、県内病診連携、大学病院の移転に向けた様々な課題に微力ながら尽力していきたいと考えています。同窓会の皆様、浅学非才の未熟者の身ではございますが、今後とも何卒ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。